

『夜』と「覚醒」

堀 畑 正 樹

はじめに

エリ・ヴィーゼルの『夜』は、まさに「覚醒」の旅である。「覚醒」とは、辞書に「目をさますこと。目がさめること。比喩的に、誤りや迷いに気づくこと。また、気づかせること」とあるが、『夜』という「覚醒」の旅は、主人公であり語り手である「私」をいかなる真実の認識へと至らしめるのか？

「覚醒」の対象は、当時再びハンガリー領になっていた東欧の小さな町シゲットで起きたことであり、1933年から1945年にかけてキリスト教ヨーロッパで起きた出来事である。それはまた、人間の「正体」、人間と神との関係にもおよぶ。『夜』における「覚醒」のスパイラルは、「私」を通してわれわれを一体どこへ導くのか、検討してみたい。

第1章

1944年の春、ジャン・アメリーによれば、その本質はサディズムあるいは「拷問」⁽¹⁾だというナチス・ドイツによるユダヤ人狩りの魔の手が、東欧の小さな町シゲットにも延びていた。この暴挙は、すでにナチスの支配下にあったハンガリー警察の手によって、町からまず外国籍のユダヤ人を強制排除することから始められたという。この憂き目にあった人々のなかには、「私」が宗教上の師と仰ぐモシェも含まれていた。奇跡的に命拾いしたモシェは、連行された人々がどのような目にあったかを知らせるた

めに町に舞い戻る。しかし、彼の言うことに誰も耳を傾けない。そのような当時の町の状況はこのように描かれている。

—「赤軍が巨人の歩みを進めている… ヒトラーがいくらそれを望んでも、われわれに危害を加えることはできないだろう…」

そう、われわれは、ユダヤ人を皆殺しにするというヒトラーの意志を疑ってさえいた。

一民族すべてを無きものにする？ 多くの国に散らばった人々を根絶やしにする？ 何百万もの人々を！ どうやって？ しかも20世紀の真っ只中に！

だから人々はすべてのことに興味を示した一戦略、外交、政治、シオニズム一、しかし自分たちの運命だけには無関心だった⁽²⁾。(p. 39)

なぜなのか？ なぜ、彼らは自分たちを待ち受ける運命にあまり関心を示さなかったのか？ この問題はシゲットのユダヤ人に限った話ではないだろう。われわれは他人のことはよく見えても、自分の姿はよく見えない。われわれが自分の顔の全体を自分の目で直接見ることができないのと同じだ。

またわれわれは、回避がきわめてむつかしい危険があっても、実際にわが身にふりかかるまでは、現実にかかる出来事として認識しない。このことはよく知られており、「他人事」や「対岸の火事」などと言われて、多少の差異はあっても、核となる意味は同じだ。つまり、不可避のことといえども、現実のものとなるまでは、

「抽象」にとどまる。

さて、「自らの運命への無関心」につづいて注目すべきは、当時のシゲットのユダヤ人に見られる執拗なオプティミズムと悠長さである。そしてその対極に置かれているのは、計画を実行に移す際のナチス・ドイツの用意周到さと速やかさである。ハンガリーの首都ブダペストのラジオがファシスト党の躍進を報じ、ブダペストから帰った友人が、「首都のユダヤ人は不安と恐怖のなかで暮らしている」と状況の深刻さを伝えても、それは「抽象」であったという。

—「ドイツ人がここまで来ることはなかろう。奴らはブダペストにとどまるだろう。戦略的、政治的理由で…」

3日も経たぬうちにドイツ軍の車両がわれわれの町の通りに姿を現した。(p. 41)

これら一連の出来事に見られる両者の対照的な違いは、《déjà》と《encore》の対句によって表現されている。

ドイツ兵はすでに町に入っていた。ファシストはすでに権力の座に就いていた。評決はすでに下されていたのだ。それなのにシゲットのユダヤ人はまだ微笑んでいたのだ。(下線は筆者、p. 42)

1944年の過越祭の7日目、ついに幕が上がったという。まず、シゲットのユダヤ人コミュニティの主だった人たちが逮捕される。

この瞬間から、すべてがとても速やかに進展した。死への疾走がすでに始まっていたのだ。(下線は筆者、p. 42)

大過去の用法が注目される。英語の過去完了

に相当する時制で、『夜』ではその頻度が高く、考察を要する⁽³⁾。文法書を見ると、『新フランス語文法』(朝倉季雄)でも、『フランス語統辞論』(島岡茂)でも、時間的な「先行性」よりも、「完了した動作の結果としての状態」⁽⁴⁾を表す「完了性」が強調されている。ここでは、行為がすでに完了してしまっており、もはやどうすることもできず、取り返しがつかない事態を表現するのであろう。語り手の「私」がこの事態に気づいたのは、語りの時点なのか、あるいは事が起きてまださほど時間が経っていないときだったのか気にかかるが、いずれにしても、事はすでに進行しており、気づくのが遅かった「後悔」の大過去となっている。当時まだひらいていたパレスチナへの道は、ここで閉ざされることになる。

ほどなく、シゲットの町にゲッターが2ヶ所設けられる。辛い生活を強いられたのは言うまでもない。居住空間がかなり手狭になるだけではなく、通りに面した窓などは塞がねばならない。制約が多く課せられ、不自由なこと極まりない。ところが実際には、生活は徐々に「正常」に戻ったという。まさしく「小さなユダヤ共和国」が実現したというのだ。鉄条網に囲まれたゲッターが冷たい憎しみをこめた視線を遮る防壁となり、ユダヤ人だけの平等で和気あいあいとした生活が送れたというから、皮肉なものである。

大方の人々の意見は、われわれは戦争が終わるまで、赤軍が到着するまで、ゲッターにとどまるというものであった。それで、すべてが元通りになるというのだ。ゲッターを支配したのは、ドイツ人でもユダヤ人でもなく、それは幻想だった。(下線は筆者、p. 45)

最後の一文が重要である。ゲッターを支配したのは人間などではなく、「幻想」だったというのだ。もっとも、この「幻想」とは、「われ

われは戦争が終わるまでこのゲットーにとどまるのだ」といった当時の人々の希望的観測だけを指すのではなく、「幻想」をもっと広い意味内容で、たとえば「何かもっと得体の知れないもの」とでも解すべきだろう。そのほうが、この一節の含意するところに近い。「私」が経験した最初の「覚醒」であったと思われる。

小さなユダヤ共和国に突如終止符が打たれ、強制移送が開始される。移送される人々が立ち去った通りは、大慌てで見捨てられた「市」、あらゆるものが散乱する「あいた墓」にたとえられる。

通りはあわただしく見捨てられた市のようにだった。そこにはありとあらゆるものがあつた。スーツケース、折カバン、肩掛けカバン、ナイフ、皿、紙幣、書類、黄ばんだ肖像画。一旦は持っていこうと考えたが、置き去りにされたこれらの品々。それらは一切の価値を失っていた。

いたるところにあいた部屋。扉と窓がぼかんと口をあけて虚空に面していた。すべてがもはや誰のものでもなく、みんなのものだった。使いさえすればよかった。あいた墓。(pp. 53-54)

移送列車が待つ駅までの行列を眺めたとき、「私」は「バビロン捕囚」を思い起こさずにはいられなかった。「打たれた犬」のように、うなだれて歩く行列。

第一陣の出発から2日後の最後の行列のなかには、重すぎるリュックを背負い、不平をこぼさずに、歯を食いしばって歩く健気な7歳の妹ツイッポラの姿もあった。「証言の書」⁽⁵⁾としての価値を持つ『夜』は、強制収容所で殺された両親と妹ツイッポラに捧げられていることを忘れるわけにはいかない。

このとき、父親は泣いていたという。「私」は父親が泣くのを見たのは初めてで、そのようなことは想像だにできなかったという。伝統的ユダヤ人家庭の長たる父親の無謬性が崩れ去る。それだけではない。家族を導く「父」が状況判断をことごとく誤り、挙句の果てに家族と彼自身を死に追いやる羽目になる。

この時期 [1944年の春]、パレスチナへの移住証明書を買うことはまだ可能であった。私は父にすべてを売り払い、すべてを清算して、出発するようお願いした。

—「私は年を取りすぎた」と父は私に答えた、「新たな生活を始めるには年を取りすぎている。遠い国で一から出直すには遅すぎる。」(p. 40)

父親はシゲットの町の名士であり、ハンガリー警察の上層部にも顔がきく。もし何か危ぶまれるような事態が生じたら、必ず知らせてくれることになっていたのである。町の有力者であり、周りからも厚い信頼を寄せられ、また顔が広くて情報通でもあった人間にしてみれば、まだ少年の息子の意見に従ったり、他人の好意に甘えることはできかねることだったろう。

『夜』には、「父」もしくは「父と子」のテーマが幾度となく現れる。「父」は「子」にとって生きる支えであると同時に、子供が生き延びるうえでの足枷にもなりうる。『夜』では、三つのケースが例示されている。一つは、パンのかけらを奪い合って殺し合う父と子。二つ目は、みんなから好かれ愛され尊敬される父を持つ息子のケースで、二人は数々の試練を互いに支え合って生き抜いて来た。ところが最後の最後になって、息子は自分の生存率を高めるために、「死の行進」と呼ばれた強制収容所からの退去のときに、父と離れ離れになるのを避けようとはしなかったのだ。父親は見失った息子を探し

求めて、さまよいつづける。三つ目のケースは、「私」と父親であり、ときに父を足枷に感じることもあるが、そのたびに思い直して、父が死ぬ最後まで父に寄り添う。

移送列車として使用されたのは家畜用貨車であった。一車両に約80人詰め込まれ、封印されたうえに、用を足すのにバケツがひとつ与えられたとある。シゲットからアウシュヴィッツまでの列車内の顛末が、『夜』の第2章に描かれている。

押し込められた貨車内の主役はまぎれもなくシェヒター夫人である。夫人の独壇場ならぬ独演場と言っても過言ではない。移送上の手違いから、彼女の夫や上の息子たちと離れ離れになってしまい、彼女は正気を失ってしまった。下のまだ小さい息子とともに、「私」と同じ車両に乗り合わせた彼女が、真夜中に突然叫び出す。

—「火だ！ 火が見える！ 火が見える！」
(p. 64)

—「みんな、聞きなさい、火が見える！
なんと炎！ なんと猛火！」(p. 65)

夫人の叫びは、「まるで呪われた魂が彼女のなかに這入り込み、彼女の心の奥底から言葉を発している」ようであったという。80人が閉ざされた空間で用を足すから、車両内の汚れと悪臭は堪えがたいものになったようだが、夫人の叫びに比べれば取るに足りないものだったというから、叫び声の凄まじさはいかほどのものであったろう。夫人に猿ぐつわを咬ませ、屈強な若者たちがげんこつで殴って黙らせる以外に、一緒に乗っている人々を恐怖から守る手立てはなかった。

正気を失った夫人が「見者」となり、千里眼を備えるに至ったのであろうか？ 確かなこと

は言えぬにしても、これほどまでに彼女の叫びに動揺し怯えたのは、「私」たちが夫人の叫びに何か真実の預言を直感したからだろう。夫人の千里眼は、夫人に起きた「覚醒」によるものかもしれない。

第2章

眠れぬ夜を幾夜も過ごして、見知らぬ駅アウシュヴィッツに到着した「私」たちは、1944年にこの地で何が行われていたかを知る。眼前にそれを見るまで信じられなかった。

—「おまえたちは、ここに来るぐらいだったら、もといた所で首を吊るべきだったのだ。ここ、アウシュヴィッツで何が行われているか知らなかったのか？ おまえたちは知らなかったのか？ 1944年に？」

そのとおりで、われわれは知らなかったのだ。誰もわれわれに言わなかった。その男は自分の耳を疑った。男の言葉の調子がますます激しくなった。

—「あそこに、煙突が見えるだろ？ 見えるだろ？ 炎が見えるか？（見える、私たちには炎が見えた。）おまえたちはあそこに行くのだ。あそこがおまえたちの墓だ。まだわからないのか？ 畜生め、おまえたちは何もわからないのか？ これからおまえたちを焼くのだ！ おまえたちを焼いて灰にするのだ！」(p. 73)

アウシュヴィッツ駅からさらに15分ほど走ったところにビルケナウがあり、そこで列車から降ろされた「私」たちは、「男は左！ 女は右！」と命令される。それが「私」と母そして妹ツイッポラとの最後の別れとなるとも知らずに。そして、悪夢を超える現実—子供を炎のなかに投げ込んでいる—に直面することにな

る。それでも誰かが死者の祈り「御名のあがめられんことを…」を唱えるのを聞いたとき、「私」は初めて神に対する怒りが自分のなかに湧き上がるのを感じる。

この夜に「私」から奪われたものとして列挙されているのは、人生、信仰、生きる欲求、神、魂、夢である。

その男は真実を言っているように思えた。われわれから遠くないところに、炎が穴から立ちのぼっていた、巨大な炎が。そこで何か焼かれていた。トラックが穴に近づき、積み荷をその穴に落とした。幼い子供たちだった。赤ん坊だ！ 私はそれをこの目で見たのだ… 炎のなかに子供たち。(この瞬間から眠りが私の目から失せたとしても驚くことがあるのか?)

われわれが向かっていたのは、少し離れたところにある、もっと大きな大人用の別の穴のようだった。(pp. 75-76)

穴に飛び込む2歩手前で、「私」たちは方向転換させられ、その後収容棟に入れられる。

この夜のことは、七つの《Jamais je n'oublierai》(「決して私は忘れない」)で始まる文で表現されており、この夜に「私」が失ったものはあまりに大きく、決定的なものだった。「決して私は忘れない」につづく目的語は、「あの夜、私の人生を長い夜に変えた収容所最初の夜」であり、「あの煙」であり、「私の信仰を永久に焼き尽くしたあの炎」であり、「私から生きる欲求を永久に奪ったあの夜の沈黙」であり、「私の神と私の魂を殺したあの瞬間」であり、「砂漠のようになった私の夢」である。そして最後にもう一度、「私は忘れない」が繰り返され、「たとえ私が神と同じだけ長く生きる刑を受けたとしても。決して」(pp. 78-79)と締めくくられるのである。

いずれにしても、この夜の体験は敬虔な14歳の少年にとってあまりに苛酷で、少年から時間の観念を奪うだけではなく、自己保存本能や自己防衛本能までも奪ったとある。このような心身状態で、「私」に何が起きたかという、それは人間の「正体」に対する「覚醒」であった。

意識が明晰な最後の瞬間、われわれは魂の救済を求めて、その希望もないまま忘却を探し求めて、虚無の世界をさまよう呪われた魂、この世の終わりまで空間をさまよう運命にある魂であるように思われた。(pp. 81-82)

ここでいう「われわれ」とは、誰を指すのか？ 世界各地に離散したユダヤ民族の人々、あるいはいまナチスによって囚われの身となったユダヤ人であろうか？ いや、おそらくはこの世界に生きるすべての人間にあてはまるようにも思われる。そしてまた、「私」から時間の観念を奪い、「私」に「これはまちががなく夢だ」と断言させたこの夜の体験は、「私」にわれわれの「正体」を垣間見させ、「私」を変貌させずにはおかなかった。

その夜がすっかり明けた。明けの明星が空に輝いていた。私もまったく別人になっていた。タルムードを学ぶ学生であり、子供であった私は炎のなかで燃え尽きた。残ったのは私に似た外形であった。黒い炎が私の魂のなかに這入り込み、私の魂を貪り食った。(p. 83)

悪夢を超える現実を、「私」はどのように堪えたのだろうか？ 私たちもときに悪夢を見る。その場合、私たちは悪夢にうなされて目を覚ます。すなわち、恐ろしい夢から現実逃避して安堵する。ところが、ここでは夢よりも現実のほうが恐ろしい⁽⁶⁾。「私」にこのような現

実をも生き延びさせたのは、「感覚の麻痺」,「思考の停止」,「飢えた胃袋」になりさがったことであったかもしれない。さらに言えば,アウシュヴィッツから「私」が生還できたのは,大方は偶然や幸運によるものだとしても,囚人服をまとったときの「笑い」⁽⁷⁾や空爆を受けた際の「歓喜」, なしくずしの死に対する「反抗」などが,生き延びるうえで一定の役割を果たしたことは見逃せない。

ブナ収容所に移ってしばらく経ったある日,ブナが空襲を受けるという出来事があった。この空襲は囚人たちに喜びや幸福を与える。暗くて否定的なことばかりの状況のなかで,唯一の光明, 歓喜の光景である。

—「ブナが空爆されている！」と誰かが叫んだ。

私は父のことを考えた。しかし, それでも私は幸福だった。工場が火事で燃え尽きるのを見るのは, なんとという復讐! ドイツ軍がさまざまな前線で敗北している話は聞いていたが, それを信じるべきか否か, よくわからなかった。今日は, それを裏づけるものだった!

われわれの誰も怖くなかった。しかし, もし爆弾が収容棟に落ちたら, 一度に何百人もの死者が出ただろう。でもわれわれはもはや死を怖れてはいなかった, 少なくともそのような死は。爆弾が炸裂するたびに, われわれは喜びで満たされ, 生きる希望を取り戻した。

[…]

全員が収容棟から外に出た。みんな胸一杯に火薬と煙に満ちた空気を吸い込んだ。目は希望で輝いていた。(p. 118)

強制収容所の囚人となった人々にとって, 当然のことながら, 受け入れられるものとそうで

ないものがある。極度の飢餓状態に置かれ, 極寒のなかで理不尽な待機や走行を強要されることや, あるいはきわめて悪い衛生状態に置かれて, 恥辱にまみれながら, なしくずしの死を受け入れることは到底できなかったろう。それに対して, 空爆による死は歓喜をもって迎え入れられ, 生きる希望を囚人たちに取り戻させたのである。

囚人たちが解放される日は確実に近づいている。しかし, 空爆を終えたアメリカ機が地平線に消え去ると, 「私」たちは再び「墓場」の日常に舞い戻らねばならなかった。

第3章

こうした時期に囚人たちは点呼広場での処刑に立ち会っている。第52作業班の班長の小姓を務めていた少年の処刑は、『夜』の主要テーマのひとつである「人間と神」の問題に発展せざるをえなかった。その場面の記述は3ページにわたるので, そのまま引用せずに要約して示そう。

私は他の絞首刑も見たが, 囚人たちの誰一人として泣くのを見たことがない。「これらのひからびた体が涙の苦い味を忘れてからも随分と経つ」。しかし, 例外がひとつあった。第52班の班長に仕える少年—この少年は繊細で美しい, 不幸な天使のような顔をしていた—が破壊工作の嫌疑をかけられ, 他の二人とともに処刑されることになった。処刑を行う親衛隊員もいつもより不安げな様子だった。何千人もの見物人の前で少年を吊るすことは些細なことではなかった。三人の首が輪差に入れられると, 大人の二人は「自由万歳!」と叫んだ。少年は黙ったままだった。すると「善良なる神はどこにいる?」と誰かが私の後ろで叫ぶ。収容所全体が静まり返っ

た。地平線に太陽が沈むところだった。私たちは泣いていた。

吊るされた者たちを見る行進が始まった。二人の大人は死んでいた。しかし、三番目の紐はかすかに動いていて、少年はまだ生きていた。半時間以上、少年は、私たちの見ている前で、断末魔の苦しみにもがいていた。私が少年の前を通ったとき、少年はまだ生きており、舌はまだ赤く、目の光はまだ消えていなかった。私の後ろで先ほどの男が叫んだ。「神は一体どこにいるのだ？」—私は心の声がこう答えるのを感じた。「どこにいるかだつて？ 神はここにいるよ—あそこに吊るされて、あの柱に…」

この晩のスープは、死体の味がした。(pp. 122-125)

少年の処刑を見つめた時期を境に、「私」と神の関係が決定的に変化していくように思われる。すでに起きていた変化を自覚しないわけにはいかなかったと言うべきかもしれない。この時期までの「私」と神の関係の変遷をたどっておこう。

まず、「私」と神との蜜月期と言える時期がある。少年の「私」は神への祈りに明け暮れた日々を過ごしている。「救世主の到来を早めるために断食」したこともあった。師と仰ぐモシェがカバラー(ユダヤ神秘思想)への手ほどきをしてくれた。モシェはこう繰り返したという。「人間は神に問うことによって神に近づく。これが本当の対話だ。人間が問い、神が答える。しかし、その答えをわれわれは理解しない。われわれには理解できないのだ。神の答えはわれわれの魂の奥底からやって来て、われわれが死ぬまでそこにとどまるからだ。本当の答えは、エリエール、それは君のなかにしかないのだ。」⁽⁸⁾

最初の神への疑いは、ビルケナウに到着したあの夜、炎が上がる大きな穴に向かって行進さ

せられたときに生じている。沈黙をつづける神に、何故に感謝してその御名を称えなければならないのか、納得できなくなったのである。

その後、「私」はヨブとともにあったという。「私」は神の存在を否定しはしなかったが、神の絶対的正義は疑っていたという。

私は祈るのをやめていた。なんと私はヨブとともにいたことか！ 私は神の存在を否定してはなかったが、神の絶対的正義は疑っていた。(p. 95)

神との関係がこのような時期に、少年の処刑に立ち会わなければならなかったのである。「神は一体どこにいるのだ？」との問いに対する「私」の答え—「ここにいるじゃないか、あの柱に吊るされて…」—はどう解釈すべきなのだろう。

ここにすでに見られる神への憤りが決定的になるのは、1944年の夏の終わり、ユダヤ歴の大晦日に行われたミサのときである。数千人、一万人ものユダヤ人がこの荘厳なミサに参列したという。

数千人の口が祝福を繰り返し、嵐のなかの木々のように人々はひれ伏していた。

—「御名の称えられんことを！」

何故に、何故に私は神を称えなければならないのか？ 私のあらゆる神経が反抗した。神が何千人もの子供を墓穴で焼かせられたからか？ 神が6基の死体焼却炉を昼も夜も、サバの日も祭日も作動させられたからか？ その偉大さにおいて、神はアウシュヴィッツ、ビルケナウ、ブナ、そしてかくも多くの死の工場を作られたからか？

[…]

そして私は、かつて神秘主義者であった私は、こう考えていた。「そうだ、人間は神よ

りも強く、偉大だ。あなたがアダムとイヴに落胆されたとき、あなたは彼らを天国から追放した。ノアの世代があなたの気に入らなくなったとき、あなたは大洪水を起こさせた。ソドムがあなたの寵愛を失ったとき、あなたは空から火と硫黄を降らせた。しかし、あなたが裏切り、あなたが、虐待され、のどを切られ、毒ガスで殺され、焼かれるままにしたあの者たち、彼らは何をしているのか？ 彼らはあなたを前にして祈っている！ 彼らはあなたの御名を称えている！」

〔…〕

今日、私はもはや嘆願しなかった。私はもはや泣くことができなかった。それどころか、私は自分がとても強いと感じた。私は告訴人だった。そして被告は神だった。私の目はひらかれ、私はひとりぼっちだった。神もなく、仲間もなく、恐ろしいほど世界でひとりきりだった。愛も哀れみもない。私はもはや灰でしかないが、私の人生がかくも長く結びつけられたあの全能の神よりも私のほうが強いと感じた。あの祈りの集まりの真っ只中で、私は部外の観察者のようであった。(pp. 127-129)

ユダヤ人の悲劇を自らも身をもって知った「私」は、神の無関心、神の沈黙、神の無介入、神の無力さを前にして、目をひらかざるをえなかったのだ。神を失って、心の空洞と自分がもはや「灰」にすぎぬことを自覚しつつも、人間のほうに舵を切るほかなかったのであろう。神への憤りと神を失った人間の孤独への「覚醒」というべきだろうか。「私」の「覚醒」の旅も終わりに近づく。

ナチス・ドイツの敗戦が濃厚となり、終戦が間近に迫った時期に、無謀きわまる強制収容所からの退去、後に「死の行進」と呼ばれる撤退が策動される。収容所に来て初めて「選択権」を与えられた囚人たちの多くは、退去を選ぶ。

「私」たち親子も同行を決意する。

強風が吹きすさぶ極寒のなか、70キロにおよぶ休憩なしの走行は、死者を続出させたという。「私」は、夢遊病者のように、眠ったまま走っており、ときどき後ろから激しく押されて目を覚ますありさまだった。しかしまたすぐに一瞬目を閉じると夢を見たという。死の誘惑に駆られ、「死に触れた」ともいう。

死が私を窒息させるまでに私を包み込んでいた。死は私にくっついていて。私は死に触れることができたと感じていた。死ぬという考え、もはや存在しなくなるという考えが、私を魅了しはじめた。もはや存在しなくなる。もはや足の激痛を感じなくなる。もはや何も感じなくなる、疲労も、寒さも、何もかも。(p. 157)

死との接触、人間の限界をはるかに超えた心身の酷使は、やがて「超人」のごとき思想を「私」にもたらず。自然をも超える存在、すなわち「超人」となり、同時に地上における唯一の「人間」といえる存在になったと結論づける。

われわれは自然の支配者であり、世界の支配者であった。われわれはすべてを忘れていた。死も疲労も生理的欲求も。寒さや飢えよりも強く、銃撃や死への欲求よりも強かった。断罪され、流浪の身となり、ただの番号にすぎなくなったわれわれが、地上における唯一の人間だった。(p. 158)

出発から70キロ走行し、さらに1時間歩いて、やっと休憩が来たという。雪の上で眠ってしまう者には容赦なく死が襲いかかる。なお数時間歩いて、グライヴィッツの収容所に到着する。押し合い圧し合いして収容棟になだれ込んで、生者の上に死者が積み重なって、空気道を

作って空気を「飲」まなければ窒息死する状態であったという。

このような状況のなかで、「私」は不思議な体験をしている。突然、バイオリンの音が聞こえてくる。幻聴かと疑うが、「私」の下敷きになっていたジュリエクに違いなく、彼の奏であるベートーヴェンのコンチェルトの一節が暗闇の静寂のなかで鳴り響く。翌朝目が覚めると、面前に体を折り曲げて死んでいるジュリエクの姿があった。傍らには踏みつぶされたバイオリンが横たわっていたという。

飲まず食わずで、3日、グライヴィッツに滞在する。3日目の夜明けに選別が行われた後に、収容所から追い出されて、30分歩いてレールが敷かれている野原の真っ只中で汽車を待つ。晩になってようやく到着した列車は、とてつもなく長い屋根のない家畜用貨車で、一車両に約100人押し込まれた。

貨車内で何日も過ごして、夜に目的地ブーヘンヴァルトに到着する。100人いた同乗者のうち、降りたのは10数人だったという。

「私」の父親も「死の行進」を乗り切ったが、衰弱がひどく、赤痢にかかって、「私」が懸命に看病するも、どうすることもできない。死が間近に迫っていることを悟った父は、すべてを見透したという。父親に起きた「覚醒」というべきだろうか。

—「お父さん、少し眠ったら。眠って。」

父の呼吸は乱れて、せわしかった。父は目を閉じていた。しかし、父にはすべてが見えていると、いま父にはあらゆることの真実が見えていると私は確信していた。(p. 190)

父親はまた、息子の一切を奪ったあのビルケナウの夜に、息子が彼に「人類はこのようなことを許すはずがない…」と言ったときに、こう答えていたことが思い起こされる。

—「人類だって？ 人類はわれわれに興味がない。今日、すべてが許される。すべてが可能だ、死体焼却炉でさえ…」(p. 76)

「私」は1945年4月11日までブーヘンヴァルトにとどまり、自由の身となる。解放から3日後、「私」は重い病気(中毒)にかかり、病院に移送され、そこで2週間生死をさまよう。ある日、力を振り絞ってベッドから立ち上がって、病室の鏡、ゲットー以来見ていなかった鏡を見る。

鏡の奥から、死体が私を見つめていた。

私の目に映るそのまなざしは、もはや私から離れない。(p. 200)

『夜』はこの二文で終わっている。「私」を見つめる「死体」のまなざしが、いかなる「覚醒」を「私」にもたらしたのか？ その答えは語られていない。

おわりに

「覚醒」の旅を終えたいま、「覚醒」のスパイラルがたどった軌跡をもう一度振り返ってみよう。

うかつにもシゲットのユダヤ人たちは、自分たちの運命には無関心で、「死への疾走」がすでに始まっていたことに気づくのがあまりに遅かった。執拗なオプティミズムが事態の把握を妨げた。

ゲットーを支配したのは、ドイツ人でもユダヤ人でもなく、「幻想」であった。

つぎは、移送に使われた貨車内で起きたことで、シュヒター夫人は「見者」、預言者の役割を果たしている。

預言は的中し、到着したビルケナウで、「私」たちは「悪夢を超える現実」を目のあたりにす

る。七つの誓いを立てる。

神の沈黙に対する疑問、憤りが生じる。

「私」は、意識が明晰な最後の瞬間に、われわれの「正体」を垣間見る。

ブナへの空爆が囚人たちに生きる喜びを取り戻させる。

少年の処刑によって、「私」と神との関係が決定的なものになり、神ではなく、人間のほうに舵を切らざるをえなくなった。神を失った人間の孤独は堪えがたい。

「私」たちは自然と世界の支配者になった。つまり、すべて(死、疲労、生理的欲求)を忘れることができる「超人」になったこと、同時に「人間のなかの人間」あるいは地上における唯一の「人間」になりえたというのだ。

この要約をさらに絞り込むと、人間は「幻想」に支配される存在であること。「悪夢を超える現実」が20世紀の真っ只中においても存在すること。われわれの「正体」とは、魂の救済を求めて、時空をさまよいつづける呪われた魂であること。神を失って、人間のほうに舵を切るほかなかったこと。自然と世界の支配者となったが、死体のまなざしが絶えずわれわれを見つめつづけていること。「覚醒」の旅が、「私」を通して、われわれにもたらした真実の認識とは、以上のようなものであろう。

注

- (1) ジャン・アメリー『罪と罰の河岸』（池内紀訳、みすず書房、2016年、pp. 69-70）。
- (2) Elie Wiesel, *La Nuit*, Les Editions de Minuit, 1957/2007, p. 39. 『夜』からの引用はすべてこの版による。また、引用文の後ろや本文中に記した括弧内の頁数は、この版によるものである。また、引用文の訳はすべて拙訳による。
- (3) 『夜』における大過去の頻度と用法については、稿を改めて論じたい。
- (4) 島岡茂『フランス語統辞論』（大学書林、1999年）、p. 635。
- (5) ホロコースト証言やホロコースト文学については、ロバート・イーグルストン『ホロコーストとポストモダン』（みすず書房、田尻芳樹・太田晋訳、2013年）の第1章「他の書物と同様の仕方でも読みだり消費したりしてはならない」参照のこと。
- (6) 大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ』（岩波書店、2012年）の「序 夢よりも深い覚醒へ」参照。
- (7) 「笑い」や「ユーモア」も『夜』の重要なテーマのひとつであり、論考に値する。このテーマを扱った一冊に、広瀬・佐川・伊達編著『ホロコーストとユーモア精神』（彩流社、2016年）がある。
- (8) ユダヤ人が「タルムード」を学習する場合、パレスチナ版ではなく、バビロニア版を用いるという。後者は、「結論」よりも「問題」を重要視する編集になっており、ユダヤ教育が「答え」よりも「質問」を大切にするからだという。沼野充義編『ユダヤ学のすべて』（新書館、1999年）、手島勲矢「タルムード」、p. 29。